水星交響楽団

第16回定期演奏会

5月9日(日)

府中の森芸術劇場どりーむホール

グスタフ・マーラー　GUSTAV MAHLER　　交響曲第三番　ニ短調　SYMPHONIE Nr. 3 D-MOLL

第１部　第１楽章　力強く、決然と
第２部　第２楽章　メヌエットのテンポで
第３楽章　動きをもって、愉快に、急がずに
第４楽章　極めて遅く、神秘的に、常にppp で
第５楽章　快適なテンポで、大胆な表現で
第６楽章　ゆったりと、安らぎと感動をもって

指揮　斉藤栄一

#ご挨拶

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団の演奏会に御来場いただき誠にありがとうございます。

さて、私ども水星交響楽団も、このたび創立10周年を迎えることとなりました。一橋大学兼松講堂での、ブラームスの交響曲第２番をメインとした第１回定期演奏会以来、今回で16回目の定期演奏会となりますが、当初30名の団員が、今や 100名を越えるまでに増えそれなりにバラエティに富んだ活動を行なえるまでに成長しましたのも皆様のあたたかい御支援のおかげでございます。ここで改めて深く御礼申し上げます。

今回は10年間の活動のひと区切りとして、久々にマーラーの交響曲に挑戦します。過去第４番、第２番、第５番と彼の交響曲を演奏して参りましたが、今回はその中でも最も長大な第３番を演奏致します。アルト独唱に加え、女声、児童の合唱を必要とする大規模な交響曲ですが、その内容は自然への賛美に満ちあふれ、この季節に誠にふさわしい爽やかさを持つものです。近頃は私どもも団員の平均年齢が上昇する傾向にあり、青年期を過ぎようとする者もありますが、「青年マーラー」の一側面が描ければと考えております。

最後になりましたが、今回素晴しいアルト独唱を聴かせて下さる渡部せつ子先生、またお忙しい中児童合唱をお引受けいただいた晃華学園聖歌隊の皆様、「惑星」にひき続き女声合唱をお願いした水星交響楽団合唱団の皆様、および様々な面でお世話になっている一橋大学管弦楽団の皆様、そして情熱だけで走ろうとする私達をその深い音楽性で正しい方向に導いていただいた斉藤栄一先生に深く御礼申し上げます。

水星交響楽団委員長　植松隆治

#指揮者紹介

さて、恒例に従いまして新郎栄一君について若干ご紹介させて戴きます。栄一君は昭和29年群馬県高崎市にて産声をあげました。小学校時代には級友とトンボやかぶと虫を採りに近くの山に出掛けるといった普通のガキらしい一面を持ちつつ、早くも音楽に対して人並はずれた興味を示しました。ベートーヴェンの『運命』のスコアからティンパニの楽譜を五線紙に写譜し、食事も忘れてデトロイト響の名演をカラオケ（実際にはカラではない）に、箸と机でティンパニ奏者のマネことをするといった奇行癖にその一面がうかがえます。中学に入学してすぐにブラスバンド部に入部、フルートに熱中します。ちょうど大阪で万博が開かれ、来日した若き日のバーンスタイン率いるニューヨークフィルをはるばる高崎から聴きに行って痛く感動したことも当時の貴重な思い出だと語っておられます。中学卒業後は名門前橋高校に進学され、ここでも勉学に勤しむ傍ら益々音楽に傾倒していくことになりました。傾倒の度合いが高かったためか１年間のブランクの後（笑）、京都大学文学部哲学科に入学、管弦楽団に席をおき、本格的にオーケストラ活動を開始することになります。栄一君は学生指揮者も勤め、常に中心的な存在として当楽団を引っ張って行かれたとお聞きしています。卒業後は国際基督教大学の大学院に進まれましたが、その一方で発作的にプロ指揮者への道を志し、円光寺雅彦氏、田中一嘉氏の指導を受けながら各地の学生オーケストラの指導などを行っていきます。田中氏が一橋大学管弦楽団の首席客演合宿指揮者であった関係で、一橋大学管弦楽団ならびにそのＯＢを主体とした水星交響楽団との関係が深まり、時に鼻水をたらしたり、酔ってよじ登った塀から落ちて怪我をしたり、子供を風呂にいれるからと言って酒の誘いを断ったりしているうちにいつの間にか９年の歳月が経ち、今や常任指揮者として押しも押されもせぬ地位を確立されたのであります。栄一君の人生はまさに順風満帆、今やアマチュアオーケストラ界のゴジラとして今後の活躍が最も期待されるお一人であります。媒酌人の恒例として、僭越ながら今後の人生に対してひとことだけアドヴァイスをさせていただきますと、（　中略　）であります。なお、栄一君には、美しい奥様（優子さん）と可愛いお二人のお嬢さん（桃子ちゃん、すみれちゃん）がいらっしゃいます。桃子ちゃんは日本のアンネ・ゾフィー・ムター、すみれちゃんは日本のザビーネ・マイヤーに育てるべく、早くも英才教育に余念がないとの噂も聞かれております。（　拍手　）

媒酌人挨拶より抜粋

＃独唱者紹介－渡部せつ子さんは東京芸術大学声楽科を卒業。H.ロイター、中山悌一、原田茂生に師事。柔らかく、響き豊かなメッツォ・ソプラノにベルギーでさらに磨きをかけ、1978年の二期会公演でオペラ・デビュー。その後多くのオペラ、歌曲で舞台を重ねる。アルトソロとしても多くのオーケストラと競演。こんな素晴らしい渡部さんに水星交響楽団はくにたち市民第九合唱団の演奏会を通じお近づきになることができました。渡部さんをお迎えした1989年第８回定期、マーラー交響曲第２番「復活」は私達にとってかけがえのない演奏会になりました。水星交響楽団は、渡部さんに歌っていただける曲をいつも探しています。

＃水星交響楽団合唱団－水星交響楽団が合唱のある曲を演奏する時、いつも助けて下さるのは柴大元さん率いるこの合唱団です。第14回定期演奏会の、G.ホルスト「惑星」の為に結成。水星交響楽団と以前オペラ等でご一緒したことのある方々の集りです。

＃晃華学園聖歌隊－調布市の私立晃華学園中、高等学校の聖歌隊の皆さんに児童合唱を受け持って戴きました。汚れを知らない歌声に水星交響楽団の面々の汚れきった魂は浄化されることでしょう。　（指導　森川文邦先生）

#曲目紹介

ザルツブルグ東方にアルプスの峰に囲まれ、大小76の湖を持つザルツカンマーグートと呼ばれる湖水地帯がある。ザルツブルグよりリンツへ向かう高速道路に乗り約１時間、ザルツカンマーグート最大のアッター湖の西側出口から湖を半周程すると、マーラーがこの曲を作曲したシュタインバッハに到着する。マーラーの常宿は今も旅館として残り、その裏手の湖沿いに作曲小屋が再現されている。目の前には、湖水と山々が迫り、シュタインバッハを訪れたブルーノ＝ワルターが、景色の美しさに圧倒されたというののもうなずけた。マーラーと親交のあった画家、グスタフ＝クリムトもこの地を好み、恋人と夏を過ごしがてら、湖畔の絵を何点も残している。

グスタフ＝マーラーは、1860年７月７日にボヘミアのカリシュトで、ユダヤ人の酒造工場主の息子として生れた。イーグラウ、プラハ、ウィーンで音楽を学んだ後、オルミュッツ、カッセル、プラハ、ライプツィヒ、ブダペスト、ハンブルクの各地で指揮者を歴任、1897年37歳の時には、ウィーン宮廷歌劇場の音楽監督に就任、その黄金時代を築き上げた。しかし、ウィーンの伝統は結局マーラーの音楽観を受け容れず、10年後には離職。1907年より、アメリカのメトロポリタン歌劇場で指揮者を勤めるが、このころから心臓病に冒され、1911年 5月、急遽アメリカより帰国、18日に51歳の生涯を閉じ、ウィーン郊外のグリンツィングに葬られた。

マーラーは、学生時代から夏期を都会と世俗じみた人間関係から離れた自然の中で過ごし、作曲に集中するのを常としていた。アッター湖畔の小屋（交響曲２～３番の時代）、湖水沿いの山中に建てられたマイヤーニヒの小屋（交響曲４～７番の時代）、牧場を臨んでなだらかな丘の斜面に建つトプラッハの小屋（交響曲８番以降）、いずれも大自然に囲まれており、音楽のシーズンには指揮者という“職業”に追われるマーラーにとっては、創造の意欲を湧かせるに最適な環境であったのだと思われる。

交響曲第３番が書かれた頃、マーラーはハンブルグ市立歌劇場の指揮者を務めていた。1895年の夏に、第１楽章意外の５楽章が作曲され、翌夏、第１楽章が完成された。同年、ニキシュにより第２楽章が、1897年ワインガルトナーにより第２、３、６楽章が演奏されたが、全曲通しての演奏は、作曲者自身による1902年 6月 9日まで待たなければならなかった（全曲初演に先立つ半年前に結婚していた、アルマ＝マーラーの手記によると、 6月12日）

作曲当時の許婚者アンナ＝フォン＝ミルテンブルクに宛てて、マーラーはこの曲についての次の様な言葉を送っている。「私の交響曲は、世界がいまだ聴いたことのないようなものになるだろう。自然の全てが発言し、人が夢の中で予感したかもしれない深く秘められた事柄を語るのだ。」マーラーが残したメモによると、この曲は７つの楽章を有し、それぞれに次の様な副題が与えられていた。

“喜ばしき知識”　－真夏の朝の夢

第１部　序　　牧神が目覚める。
　　第１楽章　夏が行進してくる。
第２部　第２楽章　牧場の花が私に語ること。
　　第３楽章　森の獣たちが私に語ること。
　　第４楽章　夜（人）が私に語ること。（アルトソロ）
　　第５楽章　朝の鐘（天使）が私に語ること。（女声、児童合唱とアルトソロ）
　　第６楽章　愛が私に語ること。
　　第７楽章　天上の生活（子供が私に語ること）（ソプラノソロ）

後にこれらの副題は削られ、かつ７番目の楽章は、交響曲第４番の４楽章として使われることになったが、聴けばこの曲は明らかに自然（神の創造物）を賛えた歌であり、そういった意味で、第３交響曲は自然を愛したマーラーの代表作なのである。

以下、各楽章についての簡単な説明を加える。

第１楽章　マーラーの交響曲に特徴的な葬送行進曲的部分（自然の響き、“山地の岩が語ること”）と呼び声に導かれて遠くから近づく“夏の行進曲”とから成るソナタ。

第２楽章　メヌエット。間に２回の軽快な舞踏をはさみながら姿を変え、最後は消え入るように終わる。この楽章についてマーラーは「私が作曲したものの中で、花だけがそうありうるような、もっとも天真爛漫な曲。」と語っている。

第３楽章　「子供の不思議な角笛」の中の詩「夏の日の別れ」に基づく。長調とも短調ともつかぬ響きの中に、鳥の鳴き声がちりばめられ、郵便馬車のラッパが遠くから聞こえる。“カッコウが死んだ。誰が夏の退屈しのぎをしてくれるのか！それは夜鳴きウグイスにちがいない。”

第４楽章　ニーチェの「ツァラトゥストラは、かく語りき」の詩から。

第５楽章　再度「子供の不思議な角笛」のテキスト。児童合唱による鐘の音に伴い、「三人の天使が美しい歌をうたい」が女声合唱により歌われる。

第６楽章　暖かい愛情に満ちた主題と、透明で淋しげな主題が交互に歌われ、コラールで曲を結ぶ。作曲者は、ミルテンブルグに宛ててこう書いている。「この楽章のモットーは、次のようなものです。『父よ、私のこの傷をごらんください。いかなる生き物も死なせないでください。』私はこの楽章が『神が私に語ること。』と呼ばれても良いと思います。神がただ愛としてのみ理解されるだろう、という意味においてです。」

今演奏会をもって、水星交響楽団によるマーラーチクルスも、角笛交響曲シリーズを完成させたことになる。次に選ばれる曲が、私達にとって更に大きなステップとならん事を。

（福島）

MEMBERS

Concert Master 福島 秀哉

1st Violin
青島 琴子
猪本 桃子
今井 厚
梶浦 真美
神薗 健次
小林 昭寛
小松 元子
佐久間 陽子
高橋 広
田中 淳一郎
津田 暁夫
戸村 将文
西端 雄一
野村 国康
前嶋 靖子
松林 俊
平体 由美
○福島 秀哉
三浦 浩明
吉野 裕敬

2nd Violin
石川 智子
岩槻 里子
大西 一恵
加藤 結香
黒川 夏実
小出 明美
小林 美保子
神内 美香子
鈴木 尚志
田村 桂子
徳地 伸保
藤原 愛子
真壁 三枝子
溝口 由里子
目黒 ゆりえ
○山岡 佐江
吉田 玲子

Viola
大平 淳一
金田 豊
川俣 英男
菊池 晃二
新保 博康
鈴木 誠治
西田 実
西本 幸子
野口 雄裕
野崎 由紀子
長谷川 卓
○吉田 健一郎

Violoncello
○伊東 敦
小俣 麻衣香
後藤 晶子
鈴木 皇太郎
高原 学
橘 温子
中山 佐知子
西島 元
前田 秀紀
牧野 香織
三輪 恭子
能岡 雅人

Contrabass
新井 奈保
大西 功
落合 毅
刈田 淳司
西永 章彦
花田 信彦
○宮田 千春
宮田 美香
山田 光洋

Harp
東森 真紀子
福田 みさ子

Flute
神山 真美
佐藤 研一
関根 文子
西村 かよ子
矢矧 由希夫

Oboe
上野 真樹子
小出 裕之
小林 桃恵
野口 秀樹
古川 暁子

Clarinet
岡坂 博誠
小川 慎一朗
芹沢 佳子
西村 伸吾
安田 奈保
横地 篤志

Bassoon
菅 恵子
冨井 一夫
宮川 資之助
安田 圭介
渡辺 さつき

Horn
伊集院 正宗
出浦 敬
榎原 尚徳
大塚 昭彦
柿沼 点
北 典子
小松 泰三
東森 智史
中島 逸郎
福沢 守
松本 英之
山形 尚世

Trumpet
岩瀬 世彦
奥村 達也
草本 大輔
星野 幸太郎
皆川 裕作
吉新 幸代

Trombone
岡山 真一郎
佐々木 英王
佐藤 幸宏
高橋 康昭
福沢 親

Tuba
植松 隆治

Percussion
梶浦 未紀
高橋 淳
中尾 友子
山本 勲
吉村 恵一
横田 麻子

一橋大学管弦楽団サマーコンサート

1993年 7月 4日（日） 2時開演 府中の森芸術劇場どりーむホール

指揮：田中一嘉　　シベリウス SYMPHONY NO.2 交響曲第２番

水星交響楽団 第17回定期演奏会

1994年 2月 6日（日） 2時開演 サントリーホール

指揮：斉藤栄一

DEBUSSY NOCTURNES 夜想曲

SCHUMANN SYMPHONIE NR.3 "RHEINISCHE" 交響曲第３番 ライン

STRAVINSKY LE SACRE DU PRINTEMPS 春の祭典

グスタフ・マーラー《交響曲第3番》

Ⅳ. (Sehr langsam. Misterioso.)

O Mensch! Gib acht!
Was spricht die tiefe Mitternacht?
Ich schlief!
Aus tiefem Traum bin ich erwacht!
Die Welt ist tief!
Und tiefer als der Tag gedacht!
Tief, tief, tief ist ihr Weh!
Lust, tiefer noch als Herzeleid!
Weh spricht; Vergeh!
Doch alle Lust will Ewigkeit!
Will tiefe, tiefe Ewigkeit!

第4楽章（きわめて緩やかに。神秘的に。）

おお、人間よ！　こころせよ！
深い夜がいま何を語っているか？
わたしは眠ってしまっていた！
いま深い眠りから醒めたところ！
世界は深い！
それも、白昼が考えてきたよりも深いのだ！
深い、深い、深いのだ、世界の苦悩は！
悦び、このほうが心痛よりもなお深い！
苦悩は告げる。逝け、滅びよ！
だが、悦びはなべて永劫を欲するもの！
深い、深い永劫を欲しているのだ！

Ⅴ. (Lustig im Tempo und keck im Ausdruck.)

Bimm, bamm, bimm, bamm.
Es sangen drei Engel einen süβen Gesang;
Mit Freuden es selig in dem Himmel klang,
Sie jauchzten fröhlich auch dabei,
Daβ Petrus sei von Sünden frei,
Und als der Herr Jesus zu Tische saβ,
Mit seinen zwölf Jüngern das Abendmahl aβ:
Da sprach der Herr Jesus: Was stehst du hier?
Wenn ich dich ansehe, so weinest du mir!
Und sollt' ich nicht weinen, du gütiger Gott?
Ich hab' übertreten die zehn Gebot.
Ich gehe und weine ja bitterlich.
Du sollst ja nicht weinen!
Ach komm' und erbarme dich über mich!
Hast du denn übertreten die zehn Gebot,
So fall' auf die Knie und bete zu Gott!
Liebe nur Gott in alle Zeit!
So wirst du erlangen die himmlische Freud'!
Die selige Stadt war Petro bereit't
Durch Jesus und Allen zur Seligkeit.
Bimm, bamm, bimm, bamm.

第5楽章（テンポは快活に、表情は大胆に。）

ビム、バム、ビム、バム。
三体の天使がすてきな歌をうたっていた。
喜びにみちた祝福の声が天国に響いていた。
天使たちはうたいながら嬉しそうに声をあげ、
聖ペテロさまの罪が許された、と喜び叫んだ。
主イエスは、十二人の弟子と食卓につかれ、
いっしょに晩餐をとりはじめられるうちに、
お訊きになった。そこのおまえ、どうしたの。
よくよく見れば、泣いてるようにおもえるが。
泣かずにはいられません、こころ寛い神なるかたよ！
わたしは十戒を踏み破ってしまったのです。
どうして泣かずにいられましょう。
もう泣いてはいけない、泣くことはない！
ああ、どうか憐れみをたれたまえ！
十戒を踏み外したとおもうならおもうで、
そこに跪き、神にむかって祈りなさい！
いついかなる時も神だけを愛することだ！
そうすれば天国の歓喜を身にすることになろう。
ペテロには至福にみちた都が、イエスによって、
すべてのひとを祝福するために、誂えられた！
ビム、バム、ビム、バム。

☆水星交響楽団合唱団　　代表　柴　大元

SOPRANO Ⅰ
高橋澄子
高橋宏子
野出尚枝
幅岸みち子
森　みどり
吉田智子

SOPRANO Ⅱ
大島玲子
大橋久子
小島育子
小林荘子
坂井和子
高橋博子
廣瀬由香里

MEZZO SOPRANO Ⅰ
植竹淑子
大倉葉子
柴田佳恵
鷹取七緒
武田恵美子
葉山葉子
藤田佳世
矢島正子

MEZZO SOPRANO Ⅱ
石黒由美
河内菜穂
斉藤真弓
鈴木豊子
藤田純子
吉野美穂

ALTO Ⅰ
関　永子
関崎　恵
林　道子
北條聖子
松本朋子
矢野鏡子
吉田尚美

ALTO Ⅱ
安藤裕子
岩崎叔子
加藤幸江
小松匡子
佐藤郁子
西川美枝子
松島三佳

☆晃華学園聖歌隊　　代表　森川　文邦

SOPRANO
鮎京智子
尾崎裕美
坂本都子
田中あすか
藤井ひとみ
奥田美奈子
戸田亜希
鬼山奈穂子
垣見友紀子
桑野佳奈子
古倉もゑぎ
足立彩子
坂井佐奈栄
鈴木文子

ALTO
得平奈々恵
田川澄子
野口紀美子
宮原朋子
村上朋加
河西佐和子
柴田　藍
遠藤晴子
渡辺彰子
墨岡卓子
井上久美子
薄井和歌子
片本多美

●訂正

指揮者紹介

一行目　…昭和29年群馬県高崎市にて…　→　…昭和29年京都府京都市にて…

MEMBERS

PERCUSSION

野村　真美　〈追加〉

1ST VIOLIN

高橋　広　→　高橋　廣

VIOLA

鈴木　誠治　→　鈴木　誠司